

2023. 5. 7 (日) 使徒7:59~60

7:59 こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで言った。「主イエスよ、私の霊をお受けください。」

7:60 そして、ひざまずいて大声で叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、彼は眠りについた。

<説教>

「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」(56)これが、〈聖霊に満たされ〉、聖霊の力で、聖霊によって開かれ明るくされた信仰の目で〈じっと天を見つめていた〉(55)ステパノが、ステパノを訴えている人々に対して語った最後の証言(即ち証しの言葉)でした。

イエスをキリストと認めず、信ぜず憎んだ人々によって十字架で殺されたが神によって復活させられたお方、人としても生きておられる生ける神の子、キリスト、イエスが栄光の神の右に立っておられるとステパノは証言しました。地上で今もイエスをキリストと認めず、信ぜず憎んでいる人々の前に立って、イエスをキリストと認め、信じ、イエスが生きていと証言している自分を、イエスも今お約束どおりに天の父なる神の前に立って認め、証言して下さっている。そして自分をみもとに迎え入れようとして下さっている。なんと素晴らしいこと、嬉しいこと、感謝すべきことでしょうか。ステパノは初めから〈御使いの顔のよう〉(6:15)な顔で証言して来たのですが、ここに来てその輝きは最高潮に達したと言えるかもしれません。

ステパノにとってはそのようにこれ以上ない喜びと感謝、慰めと励ましに満ちたイエスについての証しでした。しかし、彼の証言を聞いた人々、〈心と耳に割礼を受けていない人たち〉(51)にとっては、それはイエスを思い起こさせる言葉であり、神冒瀆としてこれ以上聞くに耐えられない言葉でした。それで、〈大声で叫びながら、耳をおおい、一斉にステパノに向かって殺到し…彼を町の外に追い出して、石を投げつけた〉(57-58)のです。

「石打ちの刑」は、囚人を〈町の外〉に連れて行き、人の背丈の倍以上ある崖の縁に立たせ、複数の証人のうちの一人が囚人を崖から突き落とし、それで死ねばよし、死ななければ第二の証人が心臓めがけて石を投げ落とし、なおもそれでも死ななければその他の人々が更に石を投げつけて殺すというやり方でした。ステパノをもそうやって石打ちにしたときの〈証人たち〉が(自分たちの上着をサウロという青年の足もとに置いた)のです(58)。

さて、〈こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで言った。「主イエスよ、私の霊をお受けください。」そして、ひざまずいて大声で叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、彼は眠りについた。〉(59-60)。自分を突き落とし、石を投げつけている人々にはステパノは目もくれず、天の〈神の右に立っておられるイエスを見〉(55)続けていました。そして主に向かって祈りました。

このステパノの最後の姿と祈りの言葉から思い起こされるのは、もちろん、十字架の上でのイエスのお姿と二つのみことばです。一つは〈イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。〉(ルカ 23:46)であり、もう一つは、〈そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦しください

い。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。』(ルカ 23:34) です。

ルカが第一巻(福音書)に書き留めたイエスのみことばと、第二巻(使徒の働き)に書き留めたステパノの言葉が似ているのは、ルカの作り話ではありません。人々によって石で打たれて殺されようとしていたステパノが、やはり人々によって十字架につけられ殺されようとしていたときのイエスに倣って言い、祈ったのです。

十字架上のイエスは「父よ」と言われましたが、ステパノは「主イエスよ」(59)、「主よ」(60)と言いました。それは、何よりもイエスが天の父なる神と全く同じ主なる神であるという信仰の告白でした。そして既に見たように、十字架でステパノの罪のために死なれたイエスが父なる神によってよみがえらされ、今も生きておられ、ステパノが見させていただいたように天で神の右におられ、彼のためにとりなしてくださることに對しての喜びと感謝の告白でした。

「私の霊をお受けください」と全き平安と信頼のうちにイエスに自分の霊を完全にお渡ししたのは、自分は神に捨てられた者ではなく、「今日、イエスとともにパラダイスにいる」(cf.ルカ 23:43)という信仰の告白でした。なぜなら「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と十字架上で大声で叫ばれたイエスがステパノの代わりに神に見捨てられてくださったので、イエスを信じるステパノはもう神に捨てられる恐れがなかったからです。自分の死に臨んでこのように告白することが私たちにも許されている幸いをよくよく覚えたいと思います。もちろん、これは死ぬときにあわてて思い出したように祈ることでないでしょう。私たちは日々祈り、自分自身を主イエスに明け渡し、お委ねして生きる必要があります。

「この罪を彼らに負わせないでください。」とステパノは祈りました。イエスを十字架につけた人々について「自分が何をしているのかが分かっていないのです。」とはイエスが人の本当の姿を完全にその心の奥底まで知っておられ、さばくことがお出来になる審判者だからこそ言うことができたことばだと思えます。今、まさに聖霊に逆らい不信仰と暴力でステパノを殺そうとしている人々のしていることは〈罪〉にほかならないとステパノははっきりと指摘したのです。そのうえでステパノが彼らの「罪の赦し」を祈ったのはもちろんです。主イエスに罪のさばきと同時じ罪の赦しがあるという恵み深い事実をステパノは信じていました。ステパノと同じ信仰に生きるべき私たちも祈ります。「私たちの負い目をお赦しください。私たちも、私たちを負い目のある人たちを赦します。」(マタイ 6:12)と。これもまた死の間際だけでなく、「主の祈り」の中で日々祈り続けるべきことです。

ステパノの最後の祈りは(そして当然それまで日々捧げて来た祈りも)無駄ではありませんでした。そのとき、その場において、〈ステパノを殺すことに賛成していた〉(8:1)〈サウロという青年〉(58)に主イエスは後に現れ、サウロをお召しになるのです。

こうしてステパノは〈眠りについた〉(60)とルカは記しました。アナニアとサツピラ夫妻の死(5章)は「息絶えた」「死んだ」としましたが、ステパノは「眠った者」とされました。それは彼がイエスと同じようにやがて復活させられる(起き上がらせられる)からです。イエスが死に対する勝利者であることはご自身の復活によって明らかにされましたが、またそれ以前にも会堂司ヤイロの娘やラザロの死を「眠っている」ことだとして生き返らせたことによって明らかにされていきました。主イエスを信じ、主にあつて死ぬ者は死んだというより〈眠りについた〉だけであり、〈霊〉はもちろん死なず、体もやがて主に

あつて起き上がらせられ（復活させられ）、永遠に主とともに天の御国で生きるのです。

ステパノは〈死に至るまで忠実〉にイエスを信じ、イエスに従い、イエスを証しし、殉教して〈いのちの冠を与え〉られました（黙示 2:10）。それは、彼の罪のために十字架で死なれ、復活し、昇天して神の右で彼のために神にとりなしつつ聖霊を与え続け、信仰を与え続けてくださった主イエス・キリストのおかげでした。今、ステパノが受けたのと同じ幸いと約束が私たちに差し出されており、私たちもそれを信仰によって受けるのです。